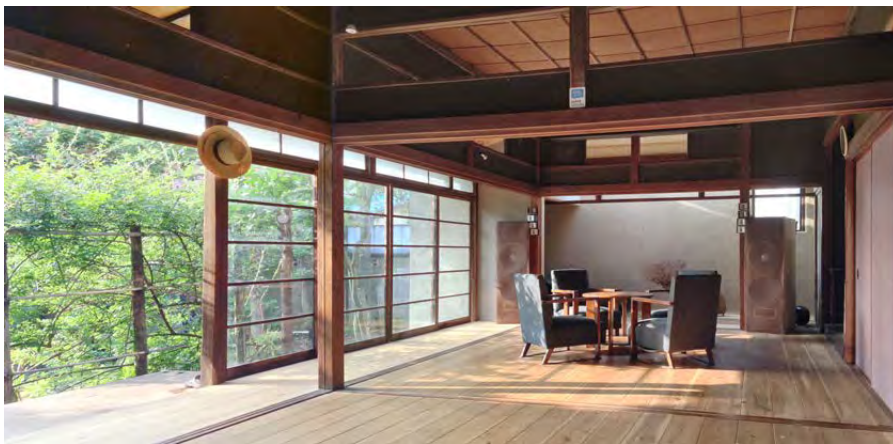


市民イニシャティブによる 地域の拠点作りの展開

多摩美術大学
環境デザイン学科 教授
堀内正弘



シェア奥沢メインルーム

1 | 公共でできないことを 個人のイニシャティブで作る

自宅に隣接する空き家を活用し、2013年7月に「シェア奥沢」というスペースを開いた。シェア奥沢が目指したのは、居心地の良い「ご近所の拠点作り」で、空き家のオーナーが個人として取り組んだ非営利のプロジェクトである。

私は、都市計画コンサルタントとして、行政による市民参加のまちづくりのお手伝いをしてきたが、良い話で盛り上がりつつも、なかなかアイデアが実現しない、という状態にやきもきしていた。そこで、私自身の責任でできる自宅シェア奥沢を開いたところ、思いのほか順調に展開し、予想以上の成果が得られた。本稿ではその一部を紹介したい。

私は長年、地域の人が気軽に集まれる「場」の提案をしてきたが、東日本大震災の後に今のビ

ジョンが明確になった。それは、公共でできないことを、役所におねだりするのではなく、民間、それも「個人のイニシャティブ」で作るということ。行政や企業であっても、良い成果が出ているケースでは、キーパーソンの果たす役割が大きい。ネガティブチェックが支配的で、出る杭がすぐ打たれてしまうような組織風土ではなかなか成功しない。

シェア奥沢は「東京の世田谷だからできたのしょう」と言われることがあり、好条件がそろったことは事実である。しかし、シェア奥沢が生み出されたプロセスには、一般化できるノウハウがいろいろあることを感じており、別の地域や違った状況でプロジェクトを円滑に展開するためのヒントとなれば幸いである。実際、世田谷区ではこのような流れがいくつも芽生えており、保坂展人区長が市民に呼びかけて開いている勉強会のテーマが「世田谷をみんなでDIYしよう！」である。



このキャッチコピーはミーティングの場で区長がご自身で決めたものである。

2 | 空き家をDIY + 助成金による耐震補強工事で地域の拠点に

昭和の初めに建てられた私の自宅には、親戚が住んでいた棟続きの家があり、約15年空き家状態であった。活用したい気持はあっても、祖父の代からの不要物が山積みで、いわゆるゴミ屋敷状態というものはなかなか手を付けられず、年月が過ぎていた。このような状況でオーナーがもつ心理的バリアーは高い。昨今の空き家問題にはいろいろあるが、古い家にはよくあるケースだと思う。

そこに、「片付けるから使わせて欲しい」という人たちが現れた。港区にあった「三田の家」で「共奏キッチン」を主催していたTさんらだ。慶應義塾大学の教員有志が大学近くの一軒家を開いた三田の家では、ゼミや公開イベントを開いていた。私は共奏キッチンに参加したことがあり、小さな家という空間のマジックを身をもって体験していた。そこが閉鎖されることになったので、シェア奥沢で共奏キッチンを開催したいという。ちょうど私のゼミで「ご近所でクールシェア」を自宅でやろうとしていたので、その申し出を受け入れた。

2013年6月頃から、共奏キッチンの常連さんやご近所の方たちの手でみるみるうちに不要物が片付き、昔の懐かしい空間が姿を現した。片付け半ばで開いたプレ共奏キッチンには多くの人が集まり、応援隊の人数はさらに増えた。畳を上げて床を張り替えることになり、製材所から買い付けた杉板を敷き詰め、蜜蝋で仕上げるという作業を



DIYによる建具修理



DIYによる床張り

DIY（参加者による手作り）で行った。キッチンの整備、窓の修理など、手間のかかる仕事も皆で行い、仮オープンにこぎつけた。大きな懸念は、戦前の木造建物の耐震強度の問題だった。ちょうど、世田谷区で「空き家等地域貢献活用事業」の募集が始まることを知り、応募したところ採択され、耐震補強工事を実施することができ、正式オープンとなった。この制度は区長の「世田谷区空き家研究会」の成果だということを知り、研究会や、区長を囲んだ「シェアトーク」をシェア奥沢で開催した。区長が敷かれた流れに合致し、助成金のお陰で、DIYではできない工事を業者に委託することができたのが有り難い。

市民イニシャティブによる 地域の拠点作りの展開



耐震補強工事

3 | 共奏キッチン：仕切らない進行 というマジックに学ぶ

まずテーブルに食材が並べてある。当日の参加者たちは、それを見て、どのような料理を作るか話し合いで決める。それが決まらないうちに食事になりつけないという状況に皆はとまどう。そういった状況で、初対面の人たちが自己紹介もなく、いきなり目標をもったチームとなる。メニューが決まったら、足りない食材を買い出しに行く人を決める。お料理が初めての人でも、材料を刻むといった簡単な仕事を担当する。このような共奏キッチンのスタイルはお料理に時間がかかり、午後6時に作り始めて食べられるのはたいがい午後8時頃である。でもこのプロセス自体を楽しみ、終わったところは和気あいあいとなり、食事も美味しい。達成感を皆で共有する。ここには初対面の人の自然なコミュニケーションの発生、そして連帯感をもったチームが生まれる様子を見ることができ、このように生まれたチームのお陰で、シェア

奥沢が片付いたわけである。三田の家で始まり、シェア奥沢に引き継がれた共奏キッチンは、その経験者にノウハウが引き継がれ、今では他の場所でも開催されている。

個人で出来ないのも、通常はお金で解決せざるをえないことでも、チームの力のできる。それが、空き家活用ととてもなじみが良いということに注目したい。



三田の家から引き継いだ共奏キッチン

4 | コミュニティカフェから、ワーキングスペースに

ふだんのシェア奥沢は、お茶を飲んでおしゃべりをするだけでなく、「作業を一緒にやる」ということにこだわった「ワーキングスペース」である。ワーキングは、利用者さん同士のコミュニケーションにより、例えばフリーランスのライターが、ここで出会ったデザイナーとコラボするといった展開がある。そして、シェア奥沢は住宅地ならではの展開があり、例えば、子育て中のママが、子どもを幼稚園に預けている時間にサテライト勤務をす



子どもが幼稚園に行っている間のサテライト勤務



母親のバイオリン練習を、ご家族やご近所の方と楽しむ

る。電話をかけるような仕事はカフェではできないのだ。家の近くにこのような場がもっとあれば、保育園に依存しない子育てママの多様なワークスタイルを可能にすると思う。

いちばん多いのが、趣味のサークル、ヨガや太極拳といったエクササイズや、音楽の練習といった、グループでの利用だ。面白いのは、犬の散歩を通じてできたご近所のコミュニティが、地元の動物看護師Nさんをお願いして開いた「おくさわんこの会」である。これが契機となり、Nさんは、デイサロンのリーダーとして、シェア奥沢の常連さんになった。

5 | シェアトークと交流会：対話の場作りというこだわり

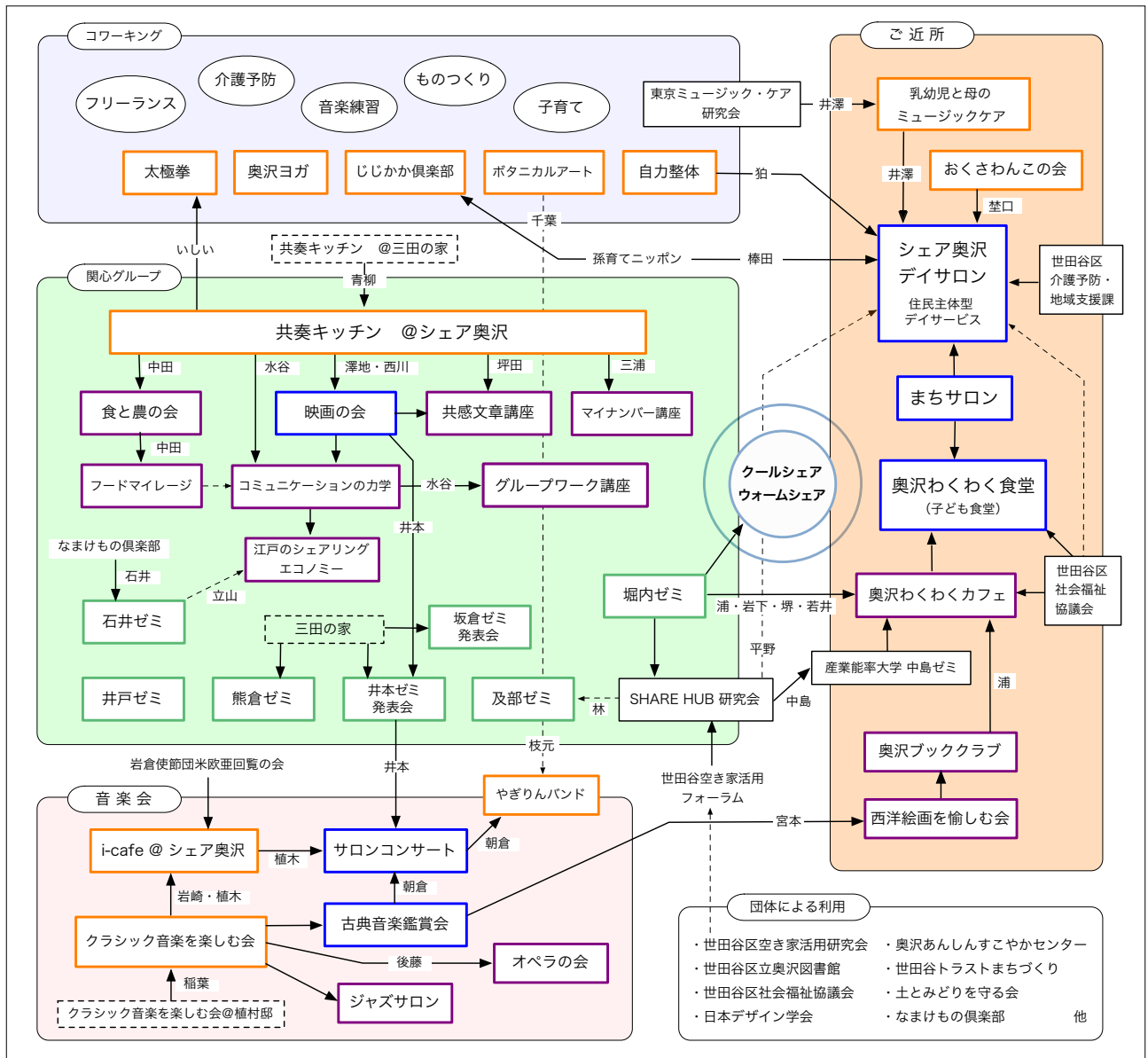
シェア奥沢では、音楽、映画、オペラなどの鑑賞会、西洋絵画の会などの、共通の関心事で集まる会が多く開かれている。いろいろな大学の教員、元教員が、大学以外の場での社会人向けの講座や発表会を行うことも多い。そういった利用におすすめているのが「シェアトーク」である。お話に一区切りがいたら、座席の配置を変えて車座となり、ゲストと参加者が顔の見える関係で「対話」を行う。一般的の講演会など、本題が終わったあと、場所の時間制約があると、参加者は一斉に帰ってしまい、せっかく素晴らしい人たちが共通の関心事で集まったのにもったいないと思う。シェア奥沢では、たいがいお話の終了後に「交流会」をセットで開催するので、そこで様々な出会いや新たな展開がある。初めて参加する方は紹介され、常連さんとの会話のきっかけとなる。このようなちょっとした気遣いがある、だれにでも居心地の良いコミュニティが育つ。キッチンが使える、アルコールもOKという、民家ならではの展



シェアトーク：三田の家の創設者、熊倉敬聡先生のゼミ

市民イニシャティブによる地域の拠点作りの展開

図1 シェア奥沢の様々な活動の相関図



開で、これを求めてシェア奥沢を使う人も多い。
 シェア奥沢に最初に来るきっかけは、関心のあ
 るテーマのイベントに参加する、あるいはコワー
 キング利用をする、といったことが普通である。
 交流会に参加することで、知り合いができ、他の
 活動を知り、他の会に出るといった流れで、「常連

さん」となる。常連さんは来る回数を重ねること
 で、シェア奥沢にもうひとつの自分の家のような
 居心地の良さを感じるという。
 シェア奥沢では様々な会が開かれているので、
 それらの相関図(図1)を作ってみた。矢印は個
 人のご縁で生まれた新しい会や結びつきを示して



ご近所の宮本さんが始めた、西洋絵画を愉しむ会



庭を使った、土とみどりを守る会のミニ園遊会



ご近所の後藤さんが始めた、オペラの会の交流会



お料理や配膳は、常連さんのチーム力の賜物

いる。今はオーナーが関与せずに始まり、自主的に運営する会が多い。交流会での出会いから、共通の関心事が生まれる。それがきっかけとなり、新たな会を立ち上げようという話になる。このような展開があるのが、交流会のマジックである。

6 常連さんとまちサロン：シェア奥沢の原動力

立ち上げのDIY作業に参加した人の多くが、シェア奥沢の初期の常連さんになったが、その場を「自分で作った」という思い入れが大きいと思う。初めての方は「お客さん」になりがちだが、

常連さんには会場の設営、配膳、後片付けまで進んでやってくださる方がいる。

オープン当初は、共奏キッチンの参加者の割合が高く、常連さんは現役世代（30～50代）が中心であった。5年が経過し、今では、ご近所の常連さんの割合が増え、現在の主力は団塊の世代である。生活面で特に困っていない、そして時間的に余裕があり、空いている時間で何か人の役に立つことをしたい、という方が多い。

シェア奥沢で、自分の関心のある会に参加する。そして時にはスタッフとして手伝う、自分が会を主催することもある。このような常連さんは生活に張り合いがあり、きっと将来的に介護の世話に

市民イニシャティブによる 地域の拠点作りの展開

なる割合が少ないと思う。最高齢の常連さんは、シェア奥沢のお隣にお住まいの93才の女性だが、好奇心旺盛、キッチンの片づけなど進んでやっていただく元気な方で、介護とは無縁。皆が、ぜひこのように生きたいと思うような方だ。

「まちサロン」は、ご近所の常連さんを中心に、一緒に夕ご飯を食べるという会だ。ご近所のお付き合いというものは、私が居住している世田谷区奥沢あたりでは、生まれて以来一緒、3世代にわたったおつきあいなども珍しくない。しかし、子育てが終わって移住してきた夫婦など、ご近所付き合いの契機があまり無く、シェア奥沢の活動に参加することで、ご近所の知り合いが増えたという方がいる。だれでも参加OKなので、ご遠方からの参加者がいると、話の展開が面白くなることが多い。

食事をみんなで一緒に食べる「まちサロン」。週2回、5人～10人くらいで、ご飯を一緒に食べる。初めて参加される方がいると、おしゃべりも楽しい。これは昔の「大家族」の人数で、思い返せば、私の祖父は子だくさんで、私が子どもの頃、この家に4世帯が居住していたことがあり、



まちサロン

大部屋で一緒に食事をしたが、その復活だ。まちサロンは一緒に食事をするだけの会だが、回数を重ねることは大きな可能性を生む。「住民主体型デイサービス」の情報を紹介したら、居合わせた人でやろうという展開になった。

7 | デイサロン：住民主体型デイサービスの実施

シェア奥沢で開いている「SHARE HUB 研究会」で、世田谷区が始める地域包括ケア（総合事業）の情報をいただいた。介護保険から要支援1、2を切り離し、自治体の管轄にするという事業である。「まちサロン」で紹介したところ、皆で力を合わせて「住民主体型地域デイサービス（通所型サービスB）を実施することになった。

交流会やまちサロンの経験で、手作りのお料理を提供するのはお手のものである。そして、シェア奥沢の常連さんが、様々なプログラムを提供してくれる。Kさんは元気体操を、Wさんは太極拳を、Sさんはお話の会、おくさわんこの会のNさんは小型犬を連れて来るのが人気で、ピアノ伴奏もしていただく。一番大がかりなのが「ミュージック・ケア研究会」で、3～4人のスタッフがサポートする楽しい展開だ。彼らはふだんは障がい者の支援が中心なので、高齢者向けのプログラムを開発する機会になっているという。

どのプログラムもサービスの利用者さんにたいへん楽しんでいただいております、体調が悪くない限り、皆さんがほぼ毎週お越しになる。送迎が無いので、徒歩でお越しになるが、帰り道にお互いの家を訪問する、というご近所付き合いが始まるのが、このサービスならではの展開だ。



デイサロン：日ごろの様子を語る、少人数での対話



デイサロン：ミュージック・ケア



デイサロン：リラックスタイム

2016年5月に開始して、2年以上が経過したが、毎週一回、年末年始とお盆など以外は休むことなく開催している。総合事業はあまり成功していな

いという報道があるが、シェア奥沢では極めて順調で、皆で楽しく取り組んでいる。これはスタッフとなっている、シェア奥沢の常連さんのお陰である。他の会にも参加している仲間と、交流を楽しみながらやれることが大きく、もしこれ以外に関わりがなく、仕事モードだと印象は違うと思う。利用者さんとスタッフとの距離感があまりないので、一緒に楽しむという流れで、双方にとっての「介護予防」になっていると思う。シェア奥沢で無理なく展開しているのは、デイサービス以前にシェア奥沢の活動（＝常連さんの組織化）ができていたからである。このような仕組みが広がれば介護保険の負担は減るはずである。

8 | 奥沢わくわく食堂：子ども食堂の開催

常連さんが立ち上げたもう一つのプロジェクトが、堀内ゼミのワークショップで提案された「こどもカフェ」だ。最初に、ご近所の産業能率大学の中島智人教授のゼミと連携した「奥沢わくわくカフェ」が始まった。大学生が遊び相手だと、子どもたちは大喜びだ。そして2017年12月からは社会福祉協議会と連携した「奥沢わくわく食堂」が始まった。こだわったのが、ハイレベルの衛生管理をした手作り料理。そしてご近所の常連さんが、子どもに昔遊びを教えたり、本を読み聞かせするといった、シェア奥沢ならではの多世代交流の場となる。

開催してわかったのは、近くに子どもの遊び場が無い、子育て中の母親の交流の場も欲しいといった地域のニーズである。マンション育ちの子どもにとって、古民家の空間と、庭遊びは異次元

市民イニシャティブによる 地域の拠点作りの展開



グループワークで出た、子どもカフェのアイデア



奥沢わくわくカフェ：産業能率大学のゼミと連携



奥沢わくわく食堂：世田谷区社会福祉協議会と連携



ご近所の浦さんによる、絵本の読み聞かせ

の体験である。私が子どもの時は、小学校の近くに子どもの遊び場となっていた、自由に入れるお宅があり大人気だったが、その復活である。今は子どもの遊び場、居場所が無いので、塾やお稽古ごとに行かせるというが、不登校や子どもの自殺が社会問題となっているのも無縁では無い。空き家活用などで、このようなご近所の遊び場作りができると良いと思う。

9 | 自治体と市民の連携のあり方

シェア奥沢のように、個人やNPOなどが地域の居場所として一軒家を開くケースは全国に増えており、それぞれ個性的な展開をしている。千葉県にある「プチカル柏の葉」は、ごく普通の一軒家であるが、麻雀をメインに常連さんが集まる場として賑わっている。自治体が設置した事例で有名なのは、東京港区の「芝の家」である。これは「三田の家」の流れから、港区と慶應義塾大学の連携で作られた。本当の家ではないが、昭和の家の風情で作られた縁側のある空間は、世代を超えてご近所の方が集まる場となっている。世田谷区の「地域共生のいえ」は、オーナーが自ら運営する開かれた場を、制度的に認証する仕組みだ。シェア奥沢もそのひとつだが、知らない個人宅に入ると何か勧誘をされるのでは？といった、いらぬ不安を払拭してくれるのが有り難い。

一般的に自治体と市民の協働というと、たいがい主役が自治体で、市民はボランティア的に参加することを想定しているが、シェア奥沢のパターンは、立場が逆である。

つまり、イニシャティブ（実行主体）は市民の



側にあり、自治体はそれを「制度的な位置付け（認定）」と、「助成金（立ち上げ資金）」、そして「運営資金」でバックアップするという関係性である。

シェア奥沢は、以下の様な制度を活用している。

○助成金：「空き家等地域貢献活用事業」世田谷区住宅課＋世田谷トラストまちづくり

○制度的な位置付け：「地域共生のいえ」世田谷トラストまちづくり

○運営補助金：「住民主体型デイサービス」世田谷区高齢福祉部介護予防・地域支援課

○運営補助金：「子ども食堂」世田谷区社会福祉協議会

そして、自治体や公的機関が場所代を払ってシェア奥沢を使用するケースがある。わざわざシェア奥沢を使うのは、住宅という空間の雰囲気が良い、より住民に身近な場所で開催したいといったことが理由である。

○奥沢あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）：講習会の開催

○世田谷区社会福祉協議会：ワークショップ開催

○世田谷トラストまちづくり：相談会、講座、見学会の開催

○世田谷区立奥沢図書館：講習会の開催

10 | 空き家、空き施設等を活用する 目的：SHARE HUB（シェアハブ） という拠点の提案

シェア奥沢は何ですか？とよく聞かれるが、一言で応えられない。人は住んでいないので、いわゆる「住み開き」では無い。空き家活用は手段であって、目的ではない。そこで、空き家等の未活

用の空間を使う、あるいは既存の施設の活用を基本として、自治体と市民がそれぞれの役割を主体的に担い、協働によって作る拠点が、全国に拡がれば良いのではと考え、そのような拠点をSHARE HUB（シェアハブ）と名付けた。

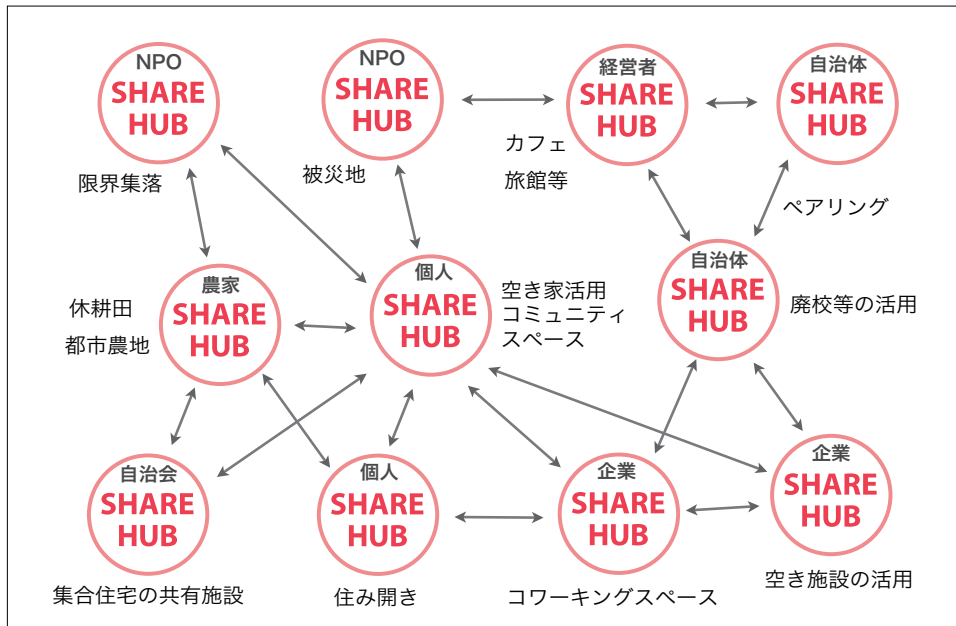
SHARE HUBは、居場所を提供するだけでなく、子育て支援、若者の悩み事相談、中高年の交流といった、それぞれの世代が、地域で心豊かな生活を営むための「最初の相談」ができるような「場」となる。場であって窓口では無い。ずっと敷居が低い。まずは何となくふらっと行く。そこが自分を受け入れてくれると感じると、そこにいる人との「対話」が始まる。その対応をするのは一定の研修を受けた市民で、話の内容に応じて、より専門特化した別の窓口を紹介することもある。

例えば、SHARE HUBは、コンビニエンスストアが全国津々浦々あるように、いたるところにあるのが理想だ。コンビニは多機能だが、立ち込んだ相談には応じてくれない。相談事は、SHARE HUBに行けば何とかなる、ということだ。SHARE HUBには多様性があり、子どもの遊び場が中心となることもあるし、高齢者の施設が核になるところもある。若者が集まる拠点もあるが、それぞれが連絡を取り合うことで「窓口」としては守備範囲を拡げておきたい。

私はシェア奥沢を実践することで、このようなアイデアを育てたが、他の場所での展開はこれからである。「まちづくり」というと何か新たな特効薬を期待することがあるが、私は、それぞれの世代の相談ごと、居心地の良い居場所作り、といったニーズの本質は、昔も今も、そして将来も大きく変化しないものだと感じている。それを一番よく知っているのは市民だ。そこをおろそかにして、

市民イニシアティブによる 地域の拠点作りの展開

図2 SHARE HUB ネットワーク



例えば目玉施設を誘致しても、皆が幸せになるとは限らない。

それぞれの SHARE HUB を結ぶ矢印（図2）は、人の相互交流である。これはなるべく顔の見える関係でありたい。場所や役割の異なる SHARE HUB が連携し、ノウハウを共有したりする。災害時などは、遠方の SHARE HUB と通信手段ですぐに情報を共有し、すぐに応援に入れる。このようなネットワークは、中央集権型、トップダウンの「神経系」のネットワークとは違い、現場の当事者が主体となった、よりレジリエント（回復力のある）な「免疫系」のネットワークである。

自治体は、SHARE HUB の制度的な位置付け（認証）と、ごく僅かなスタートアップ資金、運営資金の援助をすれば良い。主役は市民で、自治体の職員は後方支援にまわる。

以上、大胆な提案かもしれないが、私はシェア奥沢の実践から、このようなスキームが実現可能だという感触をつかんでいる。本稿で端的に紹介したノウハウのほとんどは、実践して楽しいもの

なので、共感をもって伝わりやすい。実際、三田の家のノウハウがシェア奥沢に伝播し、さらにシェア奥沢を体験した方による他の拠点作りが始まっている。これは「顔の見える関係」にこだわった、ゆっくりとした展開であるが、SHARE HUB が少しでも広がると、日本全体に幸せが広がることを考えている。

本稿に関連した写真、資料、参考リンクはこちらでご参照ください。

<https://urbanecology.jp/share-okusawa/>

◇プロフィール

（ほりうち・まさひろ）

1954年東京世田谷生まれ。東京芸術大学卒業、東京大学大学院、イェール大学大学院を修了。多摩美術大学教授。都市デザイン、まちづくり等の経験を生かし、市民の提案による良好な地域環境の形成等に取り組む。クールシェア、ウォームシェアの提唱者。

（2018年9月1日）